単独者概念についての新しい解釈あるいは現代的意義

中里　巧

序

私に与えられた課題は、S.キェルケゴール思想における「単独者」den Enkelteをめぐる新解釈あるいは現代的意義について、紹介するというものです。時間が限られていますので、早速この課題を遂行しようと思いますが、課題遂行に先立って、1．私にとってキェルケゴール思想の核心とはそもそも何であるか、2．そうした私のキェルケゴール理解を学問研究という場でどのように遂行しようと志してきたか、3．さらにそうした研究遂行の過程で繰り返し必然的と思われる仕方で意図せざるを得なかった事柄とは何か、簡潔に申し上げたいと思います。

1．私にとってキェルケゴール思想の核心というのは、自分の研究を振り返って云えば、『後書き』のなかでキェルケゴールが再三再四、常套句のように述べている「実存しつつ考える」eksistierende at tænkeということでした。私にとってキェルケゴール研究というのは、いわば自然科学の実験観察という必要不可欠な手続きのようにして、自分自身の何らかの体験の裏書きを必要としてきました。「実存しつつ考える」という言葉を十全に理解するためには、「実存しつつ」という自分自身の体験を、「考える」という学問研究の位相に、同時に重ね合わせる必要があるとかたくなに思ってきました。今の今では、少なくとも、同時に重ね合わせるというのは困難なことであり、少なくとも、呼吸の呼気と吸気ないしはヘーゲルの弁証法における外化Außerungと還帰Zurückkehrungのように、同時というより交互に為される営みではないかと思いますし、すべてが表層意識へと自覚化されて論理化にまでいたらせるというのは無理ではないか、むしろ下意識Unterbewußtseinないし前意識ないしは深層意識の働きに身を任せるということも有りではないか、と思いますが、長い

間は、キェルケゴール思想の核心部の本質を表層意識へと持ち込んで、徹底的に論理化すべきものであると思っていました。

2．こうしたキェルケゴール理解を学問研究という場で、ぎりぎり市民権を得るに相応しい仕方として案出したのが、精神史という手法でした。

3．さて、こうした研究遂行の過程で繰り返し必然的と思われる仕方で意図せざるを得なかった事柄というのは何かといえば、先行世代から我々の世代へと引き継がれてきたキェルケゴール思想の意味内容の次世代への継承ということです。キェルゴール思想の抱えている意味内容の存在意義は、私たち人間存在にとってきわめて本質的な事柄であり、兎にも角にも、次世代へ継承していかなければならないという、ほとんど強迫観念化した思いが私にはありました。

1．キェルケゴール思想における「単独者」をめぐる新解釈について

「単独者」をめぐる新解釈というのは、続々と刊行される内外の研究論文における新解釈という意味ではなくて、人間存在にとってきわめて本質的な事柄である「単独者」概念の意味内容を次世代へ継承しようと試みるときに不可避的に発生するものとしての、新解釈です。精神史的観点から云えば、言葉は同一であっても意味が異なること、ならびに、意味は異なっていても言葉が同一であることというのは、精神の営みが歴史的であり、生成変化するものである限り、不可避的事象であって、単純素朴に、概念の意味も言葉も時空間を貫いて常に同一であるという考えは、精神史的には受け入れがたいのです。

時代も言語も文化も、価値観・世界観・心情風景・リアリティそのもの言い換えれば有意味性体系自体が、キェルケゴール時代の読者と我々とでは異なっているわけですから、「単独者」概念の意味内容を次世代へ継承しようとすれば、「単独者」という言葉は不適切である可能性すらあるかもしれません。キェルケゴールテキスト群から抽出される単独者の特徴としては、1．神の面前foran Gud at være、2．逆説性、3．挫折（同時代の評価に逆行）、4．深い情緒性（不安・絶望・静謐など）、5．実存性　6．孤立・例外者　7．対

話性、８．共感的反感・反感的共感　９．神との関わりでの罪性などが、列挙できるでしょう。私は、こうした特徴を代替不可能な仕方で帯びる生き方をする人間存在を、現代のうちに探し当てて、そうした人々の精神史的徴表を、逆に遡行する仕方でキェルケゴールテキスト群にある「単独者」概念に重ね合わせて、その意味内容を次世代へと継承できないだろうか、と当初考えていました。私の念頭にあったのは、ホームレスの人々・聖愚者（佯狂者）・修道士・高齢独居認知症患者・悪性腫瘍終末期患者・自閉症者・いじめ被害者・貧困者・知的障害者といった人々であり、とりわけ現在要介護度５である実母をめぐる日々の体験から高齢認知症患者や老人介護施設入居者などをとおして、「単独者」概念を刷新する試みをおこなってみたいと、当初は考えていました。

２．大学や知の営みをめぐる今日的状況

ー全体主義の再来・共謀罪・権力による恫喝と権力に対する萎縮・悪の凡庸さー

しかし、キェルケゴール思想における「単独者」概念の基本的構造（罪責性や無知との関連性）に留意すると、大学における知の営みをめぐる今日的状況の只中にいる私たち自身の存在様態から遡行して、「単独者」概念の意味内容の刷新を試みたらどうだろうか、という思いが私のなかに湧きました。この試みは実際のところきわめて切迫して重要なことであると考えますので、以下に、この試みを遂行してみようと思います。

かつて大学には自治権があり、戦後も長い間各学部教授会には粘着気質とさえ思える自治意識をもった教員が多数いらっしゃいました。今は文科省の要請と暗黙の圧力や恫喝の不安感から萎縮して、学部教授会は決議権を失効し、人事権さえ急速かつ全面的に失いつつありますし、かつてと比べて個々の教員も活気がないように見えますし、各学問分野の質的内容の相違を完全に無視するとともに学生の学びに伴う間違いや失敗をまったく認めないGPA評価という、教育そのものを窒息しかねないような成績判定が、学生に対して導入されつつあり、教員に対しても、まことに画一的な教員考査が全国的に浸透しつつあります。教授会では、発言して異議を唱える教員はどんどん減少していますし、大学教員の存在意義は、多少付加価値を帯びた利潤追求手段としての経済活動

以外の何物でもないかのような、きわめて消極的諦観が支配しつつあります。

これではまるで、かつてナチスズムが支配したドイツにおける知識階層の遭遇した状況と同じではないかというのが、私の偽らざる実感です。ハンナ＝アーレントHannah Arendtは、イスラエルでおこなわれたアドルフ＝オットー＝アイヒマンAdolf Otto Eichmann裁判を傍聴して、親衛隊SS中佐で警察官僚であったアイヒマンを批評して、悪魔のように自発的に自由意志から邪悪をおこない楽しむような本質的－根源的悪人ではなくて、ヒトラーの命令に組織人としてもっぱら忠実に服従実行することを良きこととして無反省に受け止めて保身に努める一方で、アウシュビッツのユダヤ人捕虜の苦悩に対しては、まったく共感性を欠如していたしそもそもまったく関心がなかった、そうした典型的かつ凡庸陳腐な俗人と結論づけて、「悪の凡庸陳腐さ」the Banality of Evilと命名しました。他方H.アーレントは、ユダヤ人評議会が仲間のユダヤ人をナチスに売り渡したり、そのようにしてナチスと取引したりしたという事実証言をアイヒマン裁判において聴き知って、アイヒマンではなくて、ユダヤ人評議会こそが本質的－根源的悪に関与していたという傍聴記事を、アメリカへ帰国後に雑誌「ニューヨーカー」に掲載して、ナチズムを擁護しているという誤解やユダヤ人を排斥しているという誤解から、多数の人々に激しく非難されたのでした。

本務校である東洋大学文学部教授会で多少ともあれ意見を私は述べますが、私もまた組織人であり、私のメンタリティはアイヒマンとそれほど実際のところ変わらないのではないか、と言わざるを得ません。キェルケゴールは、『死にいたる病』本論冒頭で絶望を本来的絶望と非本来的絶望とに峻別して、前者を、絶望を自覚する者に、後者を、絶望を少しも感じない絶望的に無知な者、すなわち、自分自身をめぐる反感的共感であるとか共感的反感であるとか、隣人の苦悩に対する共感性であるとか、そもそも情緒性をまったく欠如して無関心な者に、それぞれ該当させています。

H.アーレントは、「悪の凡庸陳腐さ」の原因として「思考停止」Thoughtlessnessという事象を挙げていますが、アイヒマンは、アウシュビッツの只中で決して思考機能の障害に陥っていたわけではなくて、むしろナチス

党員として優れた業績をあげるため、また膨大な実務を処理するために、フルに様々に思考していたのでした。そもそも、一体何を以てまた如何にして、凡庸陳腐なる思考ならざる思考と凡庸陳腐ではない本質的な思考とを区別するのかということを、思考だけから導き出そうとすると、それほど単純容易ではないように思います。重要なのは、他者の傷みに対する共感や良心の呵責という自分や他人の痛みに対する感受性が介在しているかどうかではないか、と私は思います。

はたしてアイヒマンには、まったく感受性がなかったのでしょうか、それとも自発的に保身のために意図的に感情を押し殺していたのでしょうか。

3．絶望的無知

ー根深い負い目の脅威ー

キェルケゴールが非本来的絶望と名付けた事象は、下記のキリスト教正教会における私なりの罪理解にしたがうと（私にはキェルケゴールのキリスト教観はプロテスタント的というよりも、正教的に見えるのです）、根深い負い目と類似しているように思います。私自身の理解に拠ればK.ヤスパースは、その罪責論のなかで、自分以外の他者や先行世代によって引き起こされた罪の結果として自分が継続継承している不作為の負い目（広義の罪）を以てして「形而上学的罪」と呼んでいますが、この「形而上学的罪」と絶望的無知は、罪悪がつねに下意識や無意識へ潜り込んでいくために、表層意識において罪悪を明確に認めることが困難である点で、共通しているように思います。K.ヤスパースは、形而上学的罪を「集団の犯した罪」のなかに位置づけるとともに、こうした集団の罪は、法・道徳・国家によっては究極的には裁くことができず、神のみが裁くことが可能な罪と考えました。私なりに罪を厳密に概念化すると下記のようになります。

広義の罪	狭義の罪と負い目、作為と不作為
根深い負い目	先行世代および周囲や他者から継承された負債・責務・負担、不作為

新たな負い目	自分自身の自由意志の発動による罪の結果とその継続事象、作為の結果
本質的罪	自分自身の自由意志の発動による悪・無垢の消失（狭義の罪）、作為、根深い負い目が契機になって本質的罪を犯すことは、当然ながらあり得るし、悪魔悪霊の誘惑を機縁にして本質的罪を犯すこともあり得る、不作為の作為も含まれる
非本質的罪	根深い負い目。これを帯びていても、無垢であり得る（広義の罪）、不作為、悪魔悪霊の霊障憑依にさらされても、無垢であり得る（広義の罪）、不作為

アウシュビッツから生還したユダヤ人は、自分たちはアイヒマン自身の作為による犠牲者であり、アイヒマンが自ら主体的に残虐非道なことをおこなったのだと理解していました。ナチス以外の者誰にとっても、アイヒマンらにアウシュビッツでの残虐非道について大きな責務があることは明白でした。被害者や第三者にとって加害者がアイヒマンらであることは明白でした。

しかしアイヒマンは、責務は自分にはなく、自分は命令に服従しただけであり、責務はヒトラーや組織にあると主張したのでした。アイヒマンは、自分には主体的自由の発動による本質的罪はない、根深い負い目については自分に責務はない、命令に逆らえば、自分は処刑されていた、と主張したのでした。

アイヒマンもまた人間である以上、アウシュビッツでの自分の職務がきわめて非人道的行為に加担するものであり、その醜悪さや邪悪さについて少しは感じていたはずであり、職務上自由が制限されていたとは云え、多少の温情を示したり、そうした温情を職務に反映させたりする自由はもっていたはずです。実際、石油会社に勤めていたアイヒマンは、自ら進んでナチスに入党後、業績を上げて評価されナチスの重要ポストへ登り詰めていったのであり、要するに、出世欲のはてに積極的にホロコーストに関与したのでした。しかし、アイヒマンが裁判において固執したのは、不作為であり、いわば自分が絶望的に無知であったということでした。

アイヒマンは、自分自身のなかにあったに違いない温情や自由を、ナチスの

崩壊後、職務から自由になってからも尚、執拗に否定したのでした。私には、アイヒマンが自分の加害者としての責任や罪を裁判において否定したということが、ヒトラーが自殺しナチスが崩壊した後になっても、尚、アイヒマンがヒトラーの命令やナチスの職務に呪縛され続けていた何よりの証拠のように思います。アイヒマンは、自分の無罪を主張し続けることによって、実際のところ、自分自身のなかにある自由という尊厳をひたすら、破壊し続けたように見えるのです。根深い負い目が機縁になって、自分自身の自発的意志によって罪を犯すということは十分有り得ることですし、むしろその方が自然なことのように思いますが、アイヒマンは、そうした自然な人間本性の事実性を、戦後においても尚、認めませんでした。アイヒマンが執拗に様々な手段を使って逃亡し続けたことは、自分が残虐行為に加担したことについて良心の呵責をもっていなかったこと、ないしは、自分の正当性欲求に負けてしまう程度の呵責しかもっていなかったことを、示唆しています。自分の過ちを明白に認めず、心から謝罪するほどの良心の呵責をもたなかったアイヒマンは、結局のところ、自分の尊厳そのものを否定してしまったように、私には思えますし、アイヒマンは、戦後も一貫して、ナチズム有意味性体系（ナチスの世界観・価値観・人種的－民族的偏見）の内閉性に安住し続けていたに違いありません。

当時の複雑な国内国外の政治状況とアイヒマン裁判は連動していましたから（例えば、西ドイツアデナウアー政権は、イスラエルに働きかけて元ナチスである政権内高級官僚の名前が隠蔽されるように、借款や経済支援をもちかけていた）、アイヒマンの主張は、多分に政治状況を計算してのものでもあったでしょう。未だ、元ナチス党員はいたるところにおりました。戦後、アウシュビッツのホロコーストをめぐって人道に対する罪に加担した人々をドイツ国内においてドイツ人によって裁いた画期的裁判が、フランクフルト＝アウシュビッツ裁判ですが、これを主導した検事総長フリッツ＝バウアーは、元ナチス党員からの手紙や電話による脅迫ならびに元ナチス党員の政府高級官僚からの圧力や恫喝を、日常的に受けていました。アイヒマンの味方は、西ドイツ国内に尚たくさんいたのでした。

政治的事情はそうであっても、アイヒマンは有罪を認めるべきであったと私

は思います。人間が自由をもっているということは、すなわち、善をおこないうるということを示していると同時に、悪をもおこないうるということ、言い換えれば、過ちを犯しうることを示しているのです。人間の尊厳は、過ちを犯す可能性をはらみながら、過ちを犯した場合には、それを認めて、その責務を負うこと、および、謝罪を表明したり赦免を請うたりすることに存していると、私は思うのです。

容易に私たちが気づくのは、非本来的と呼ばれる絶望のほうが、状況によっては、はるかに危険であり、危機を招きやすいということです。なぜなら、非本来的絶望は、周囲や他者から継承された負債や責務であって、自分自身の自由意志の発動による本質的罪ではない、とひたすら主張して、自分自身の自由からおこなった罪に対する責務すらも、自分の下意識や潜在意識へと押し込めて隠蔽したうえで、さらに、自分の負い目や責務の一切合切を永遠に忘却するために、下意識や潜在意識という領域そのものの存在を、無視する仕方で、否定したり破壊したりするのです。こうした結果が、絶望的無知であり、絶望的無知にある人は、自分が完全に無垢であると思い込んでやまないという、いわば、絶望的無垢でもあります。

スコットランド人医師K.マッカルによれば、親類縁者である死者の霊魂は実在し、この霊魂が何らかの苦悩を抱えて、天国に引き上げられないままである場合、しばしばそうした霊魂の苦悩は、治癒困難な難病という仕方で子孫に根深い負い目として継承されると述べたうえで、そうした死者の霊魂のために聖体拝領を執行すると、死者の霊魂が天国に引き上げられると同時に、子孫に継承された根深い負い目も消失する、と云っています（*Healing the Family Tree*, by Kenneth McAll, 1982）。実際K.マッカルは、聖体拝領の執行をとおして、数千人以上の患者の病気の治癒に成功しました。ただし、当該患者が根深い負い目を認めない限り、この治癒は成立しません。

K.マッカルの事例は、キリスト教における世代を越えて継続していく根深い負い目のリアリティや、根深い負い目による疾患の治癒にとって自覚が不可欠であること、言い換えれば、自覚が絶望的無知の内閉性を破ることを強く示唆していて、興味深いのです。

4．大学人特有の単独者性

私たち大学人は、日本社会の今日的状況の只中で、共感性や他者理解を捨てて、凡庸陳腐な俗人アイヒマンに成り下がるのか、それとも、私たちの下意識や深層意識のなかに明らかに存在し続ける過去や現在の他の人々に起因する何らかの負債や、私たち自身が犯した過ちの責務を、共感性や他者理解の感度を強めることをとおして徐々に自覚化して、挫折の繰り返しを覚悟しつつも、私たちなりに多少なりとも認めていくのか、まさに、神の面前に立つ代わりに、本来的絶望と絶望的無知の双方をまたがるようにして、匿名（原因根拠が不確定）のデモーニッシュな力の作用を帯びた内閉的－今日的状況を眼前にして立ち尽くす、この時代特有の単独者になっているように思うのです。

なお、こうした匿名のデモーニッシュな力の作用を帯びた内閉的－今日的状況に寄与して、私たちを外面的にも内面的にも強力に呪縛しているものに、マスメディアや情報機器関連産業ならびに初等中等教育制度をとおして浸透した功利的知性・断片的知識の売買・評価の画一化・固定観念の増幅などがあり、これらについても、私たち大学人は、何らかの仕方であれ荷担しているであろうことを併せて、付記したいと思います。とりわけ初等中等教育は、大半の子供たちの心身を疲弊させて、慢性疲労症候群に起因する数多くの不登校児を出現させているばかりか、これら子供たちの前頭前野（人格の座）の萎縮を含む脳障害を引き起こしているという指摘があります。また、一方的指導や偏差値評価による「頭がよい」という一般的理解がありますが、こうした「頭の良さ」は、前頭前野の優位性に起因すると云うよりも、側頭葉・後頭葉・海馬の優位性に起因している、という指摘もあります*1。人格の座としての前頭前野

*1 三池輝久（熊本大学医学部名誉教授・小児科医）著『学校を捨ててみよう―子供の脳は疲れはてている―』講談社、2002年；片岡直樹（川崎医科大学教授、小児科医）・山崎雅保（心理カウンセラー）著『しゃべらない子どもたち・笑わない子どもたち・遊べない子どもたち―テレビ・ビデオ・ゲームづけの生活をやめれば子どもは変わる―』メタモル出版、2003年；三池輝久著『子どもと夜更かしの脳への脅威』集英社、2014年；三池輝久著『子どもとねむり―良質の睡眠が発達障害を予防する―』メディアランド、2011年；三池輝久著『フクロウ症候群を克服する―不登校児の生体リズム障害―』講談社、1997年；池谷裕二（東京大学大学院教授脳科学者）著『受験脳の作り方―脳科学で考える効率的学習法―』新潮社、2011年；福井一成（医学博士、医師）著『脳を一番効率よく使う勉強法』角川書店、2014年）。

のシンボル的機能が高次の知性（知恵）や高次の感情（慈悲・慈愛）であることや、指導と称して学校教育が生きがいや学問の楽しさを奪って子供たちを疲弊させている現状を、私たちは、もっと誠実に見つめるべきであると思います。またもっと、学校生活において疲弊している子供たちの失敗や過ちや間違いに対して、暖かく見つめるべきであると思います。

5．単独者概念についての新しい解釈あるいは現代的意義

現代の「単独者」は、絶望の危機にあるのですが、その絶望は、絶望の自覚のバイアスが無限大になっていくような19世紀的悪魔的絶望ではありません。現代の絶望は、下意識や深層意識との回路を切断したり、自分の下意識や深層意識そのものを無視したり、その存在を否定したり、破壊したりする方向に働いて、他者性や情緒性の一切を喪失するという絶望的無知と絶望的無垢に他なりません。現代の絶望は、現代特有の匿名のデモーニッシュな力と共鳴共振して、自分の下意識や深層意識が瓦解に向かう仕方で、内閉的なのです。ディアボロスδιάβολος（悪魔）の意味が「中傷して分断し破壊する者」であり*2、悪魔の一般的特徴が隠れて誘惑することにあるのは、きわめて示唆的だと思います（*An Exorcist explains the Demonic –the Antics of Satan and his Army of fallen Angels–*, by Gabriele Amorth, 2016）。前者は、人間精神の破滅や破壊を、後者は、とりわけ現代人の無知と連動しているように思います。

カトリックエクソシストであったアモルス神父は、悪魔Satanの本質的特徴を示して（*An Exorcist more Stories*, by Gabriele Amorth, 2002）、１．自分の願望はすべて実現可能であること、２．神の定めを優先しないこと、３．自分以外のいかなるものに対しても従わないこと、４．自分が自分の神であること、と述べています。

あたかも現代の悪魔は私たちに取り憑いて、私たちの精神を破壊し断片化して、その結果、私たちはもはや、まことに凡庸陳腐かつ一面的できわめて退屈

*2 現代英語 devil の語源は中世英語 devel ＜古英語 dēofol に由来し、dēofol はさらにラテン語 diabolus に由来し、ラテン語 diabolus は、ギリシア語 διάβολος（中傷する者）＜ギリシア語 διαβάλλειν（なかに割って入って分断し仲間割れさせて、破壊する）に由来する。

で無意味な「自分」という精神の断片になってしまっているかのようです。こうした私たちにとって救いとは、内閉性を越えて浸潤してくる痛烈な痛みをきっかけにして、非本来的絶望を自覚すること以外にないと思います。言い換えれば、表層意識や深層意識の狭間にある余白に着目することだと思います。

そうした余白は、かつてのキェルケゴールにとって恋人レギーネが「かけがえのないただひとりのひと」（単独者）であったように、それぞれの主体もまた自分が自分自身にとってレギーネであり、「かけがえのないただひとりのひと」であることを独力で見出していくしかないと思うのです。また、そのようにして余白を見出す主体のみが、主体相互の連帯をもつことも可能なのだと思います。

現代の私たちは、単独者なのではなくて、もはや単独者の廃墟ないしは断片に過ぎません。その自覚から、単独者生成の道は始まるのだと思います。

The New Interpretation and Modern Meaning of the Conception of the Single Individual (den Enkelte)

Satoshi NAKAZATO

My subject which makes clear the S.Kierkegaard's conception of the single individual(den enkelte) for the our modern societies. The following issues are always important for my S.K.studies: (1) the pivot, which appears through the existential dialectic method of mine, (2) the same pivot, which should be kept alive in the academic approach, (3) what is the careful point of the pivot.

(1) The existential thinking (eksistierende at tænke) is always for me the pivot. (2) The ideal history is my method of the academic approach. (3) the succession of the raison d'etre of S.Kierkegaard's thoughts to the next generation of the readers is been aware of.

The concept of the single individual consists of the followings: (1) to stand in front of God (foran Gud at være), (2) the paradox, (3) failure (4) the deep emotion, (5) the existential distinctions (6) the exceptional distinctions, (7) dialogue, (8) the sympathy and antipathy, (9) the sin (offence and indebtedness).

I feel the serious crisis in Japanese educational institutions including the universities and academic-intellectual activities), when I try to find out the the raison d'etre of the single individual. Because it seems to me that the raison d'etre of the single individual is total absence there.

Japanese educational institutions and their activities are very similar to Nazism, which Hannah Arendt analyzed, criticized and called as the banality of evil. I suppose that the true cause of the banality of evil would be the narrow understanding of the sin. Adolf Otto Eichmann insisted on the innocence of the crime against humanity. The basis of his insistence is the individual will. But the conception of sin does not only consist of offence (the individual level), but also indebtedness (the collective).

The modern crisis of Japanese educational institutions comes from the outside of the individual will, that is to say, the collective indebtedness. It is hope that the particularities of the single individual would expose the ignorance of the collective indebtedness and the solutions of the crisis.